

主題の「なら」の表現する内容について

ごう だ
江 田 すみれ

1 はじめに

主題の「なら」は、状況あるいは相手からの発話をうけてある話題を選び、「XならYだ」という形で、Xについての話者の評価や判断などを述べるものと説明される。しかし、例えば、次のような例はどうだろう。

(1) A「日本についてどう思いますか .」(しんにほんごのきそ)

Ba「交通が便利だと思います .」

Bb「日本は交通が便利だと思います .」

? Bc「日本なら交通が便利だと思います .」

(2) A「イチローが大リーグ記録を達成したね .」

Ba「うん、イチローってすごいね!」

? Bb「うん、イチローならすごいね!」

(1)は『しんにほんごのきそ』の文型練習の会話である。もともとはAとBaの会話である。これに「は」「なら」のついた形で主題を入れるとBbBcになる。しかし、Bbはまだ許容範囲だろうが、Bcの文はなんとなく変である。ここで「なら」が使えないのはなぜであろう。また、(2)の会話で「イチローならすごい」と言うのもおかしい。(1)も(2)も相手からの発話を受け、ある話題を選び、話者の評価を述べているという点では「なら」を使う条件を満たしているように見える。(1)Bc(2)Bbの文は何が問題なのであろうか。

今回は主題の省略、「は」による主題の明示、「なら」による主題の提示の違いを考えてみよう。一部において「って」もとりあげて比較の対象とする。

2 先行研究

丹羽哲也(1993)は「なら」について、接続助詞としてだけでなく、単文中で係助詞としても用いられるとし、その単文中での「なら」について以下のように述べている。

- ・相手を受けた表現である。
- ・相手が当該名詞を発話していないこともある。

(3)(太郎の友達に)「あ、太郎なら遊びに行ったよ..」¹⁾

- ・相手の発話中であっても、既にお互いの間で主題として確立している場合には用いられない。

(4)(山田さんの話をしている)「そういえば、山田さん{は/?なら}まだ独身よね..」

- ・自分から主題を持ち出すことはできない。

(5)?「おい、今日ならいい天気だよ..」

- ・疑問文でも「なら」は使えない。

(6)「市役所へ行くんです..」

?「市役所ならどこですか..」

また、丹羽は、相手から話題を受け取るわけではない用法を、対比的に用いられる選択の「なら」として、その性格を次のようにまとめている。

- ・前件が焦点になる。

(7)「どれを飲んだらなおりますか..」

「この黒のならいいでしょう..」

- ・対比を含む。
- ・事態と事態の対比ではない。

?(8)雨なら降っていますが、傘は持っていません。

高梨(1995)はXナラを以下のように分類している。

事態を表す 条件節のナラ	{	個別的な事態を表す場合
		事態のタイプを表す場合
事態を表さない 非節的なナラ		

Xナラについて、条件形と提題助詞に分類する考えがあるが²⁾、高梨はXナラを提題助詞でなく条件形であり、主題のナラは非節的なナラであるとしている。しかし、Xナラの中には条件節から非節的なナラまであり、両者の間は連続的であると述べている。

非節的なナラとは「XナラY」の文全体で一つの事態を表すもので、その性格は以下のようである。

- ・Yに過去の一時的な出来事を述べることができる。
- ・相手から話者へ主題の受け取りがある。
- ・Yは肯定的な内容である。
- ・相手がXを話題にしているときはナラ、八どちらも可能だが、相手の状況を見てある事柄を話題にする場合は、ナラは使えるが八は使えない。

(9)(自動販売機の前で)

「小銭ならありますよ..」

?「小銭はありますよ..」

- ・Xに焦点がある。
- ・ナラのほうが八よりより積極的にXを選んだという気持ちが表される。
- ・Yには名付け、推量的判断、当為的判断、主観的評価などがくる。

本稿で問題にするのは、第一に、相手からの情報であれば、なんでも「なら」によって主題にできるのだろうか、第二に、主題の省略と主題の明示はどのように違うか、第三にYが名付け、推量的判断、当為的判断、主観的評価であればすべて「なら」の文が成立するか、という疑問である。

なお、今回扱う「XならY」は単文のことが多いが、Xを前件、Yを後件と呼ぶことにする。

3 方法

「XならY」の文を前件と後件にわけ、順にその性格を見ていこう。

前件については、『しんにほんごのきそ』の中の短い会話、文型練習の短文などのうち主題を入れられるものに「は」「なら」を入れ、適不適を判断する形で検討していく。いろいろな条件の文で適不適を見たいと思ったが、自分の力で作った文の偏りを避けるため、教科書の中に現れる文を使うことにしたわけである。適不適の判断は筆者の語感による。ある文をどの程度多様な状況において考えられるかによって判断は異なると思うが、多くの文を検討することによってそれはある程度カバーできるであろう。

後件については、『しんにほんごのきそ』の文の文末が単純なため、条件を変えた文を作り、判断した。

4 前件

4.1 対比

日本語では、分かっているものは省いて表現する。例えば、会話の中で一度出された情報は、その後は旧情報になるのでよく省かれる。近年の日本語教科書では主題などを省いて発話する練習を第1課からしているものが多い。

(10) A 「ラオさんはインド人ですか .」(第1課)

Ba 「はい、インド人です .」

こういった文に主題の「は」「なら」をいれて検討していこう。

(10) Bb 「はい、ラオさんはインド人です」

? Bc 「はい、ラオさんならインド人です .」

もともとの文Baが最もふさわしい文であろう。Bbのように主題を明示した文はいかにも習いたての外国人の日本語、あるいはほかの人との対比を意味する文になる。第1課の名前、国籍や職業を聞いたりする自己紹介の場面でBcのように「なら」を使うと、「は」を使うよりはっきりと対比の意味が文面に表れ、「ラオさんならインド人だから大丈夫です。ほかの人はベトナムや韓国などから来たのでヒンドゥー語は分かりません」のような言外の意味を表してしまう。同様に、

(11) A 「会社はどこですか .」(第3課)

Ba 「NECです .」

Bb 「会社はNECです .」

? Bc 「会社なら NEC です .」

自己紹介で会社について聞かれた場合、「会社なら です」と答えるのはおかしい。「会社なら です」と答えた場合には「会社でない別のものは です」という発言が陰にあることになるが、そうして対比される別のものの存在が、この場合考えられないからであろう。

次の例も、もとの文では主題ではないが同じ問題である。

(12) A 「傘を貸しましょうか .」(14 課)

Ba 「はい、貸してください .」

? Bb 「はい、傘を貸してください .」

? Bc 「はい、傘なら貸してください .」

これは14課の文型練習なので、「貸しましょうか」「はい、貸してください」という応答になっているが、最も自然なのは「あ、お願いします」であろう。それでも、Baのように「はい、貸してください」ならまだおかしくないが、もし相手が傘を貸そうかといったときに、日本人が「傘を貸してください」と答えたとしたら、それは意図的に「傘を」と言っているように聞こえる。つまり、本当は車で送ってもらいたいが、相手が言い出さないからわざと「傘を」と言ってみる、などのように、なにか理由があって、本来は省くべき語を明示化しているように見える。Bcの「傘なら」は明示化とともに対比が文面に表れ、傘なら貸してほしいがほかのものはほかにない、のように聞こえる。雨が降っているときに傘と対比させるものは合羽であろうか、ほかの選択肢が出てきにくい状況なので、文自体がおかしな響きになる。これを以下のように、対比の意味が現れやすい文にすれば「なら」で成立する。

(13) 「雨、降ってきましたよ。これ、あまり使っていない傘だから、持って行きませんか？」

「そうですか、すみません。あまり使っていない傘なら、貸してください。」

「あまり使っていない傘」と「よく使う傘」の対比は充分可能であろう。

しかし、以下のように対比が現れやすい文脈であれば、「なら」は問題なく使える。

(14) A 「はさみはどこですか .」(10 課)

Ba 「そこにありますよ .」

Bb 「はさみならそこにありますよ .」

(15) A 「あれはいくらですか .」(8 課)

B 「どれですか .」

A 「あの赤いかばんです .」

Ba 「8500円です .」

Bb 「あれは8500円です .」

Bc 「あれなら8500円です .」

これらが自然なのは、「はさみ」と「ホッチキス」「のり」などの文房具、店にある「あのかばん」と「このかばん」などのように対比が普通に想定できるためである³⁾。

「なら」が自然に使えるためには、対比の文脈が必要である。例(11)のように常識から対象が一つに限られる場合、あるいは次のように文脈上、対比が入るとおかしい場合には「なら」は使えない。

- (16) A 「いいネクタイですね .」(24 課)
Ba 「ええ、恋人がくれました .」
? Bb 「ええ、これは恋人がくれました .」
? Bc 「ええ、これなら恋人がくれました .」

4.2 焦点化

次に焦点化の問題を見てみよう .
次の二つの会話を比べてみよう .

- (17) A 「木村さんは事務所にいますか .」(21 課)

B 「はい、いると思います .」

- (18) A 「木村さんは事務所にいますか .」

B 「はい、木村さんならいると思います .」

(17) が「(木村さんが)いる」ことを述べているのに対し、(18) は「木村さんはいる(が、ほかの人のことは知らない、あるいはいない)」と述べている . つまり、「なら」はそれがついたものを際立たせる役割を果たしているのである .

- (19) a これは大切な本ですから、なくさないでください .

? b これなら大切な本ですから、なくさないでください .

(19) は「大切な本」「なくさない」に焦点が置かれるべき文である . そのような場合、主題「これ」に「なら」はつけられない .

- (20) A 「あの人はだれですか .」

Ba 「ああ、あの人はハンさんです .」

? Bb 「ああ、あの人はハンさんです .」

- (21) A 「あの人はだれですか .」(16 課)

B 「どの人ですか .」

A 「あの若くてきれいな人です .」

Ba 「ああ、あの人はハンさんです .」

Bb 「ああ、あの人はハンさんです .」

(20) の会話では後件に焦点があり、A の聞きたいことはあの人がだれであるかということである . そのときに直接 Bb のように「なら」を使って答えると唐突な感じがする . それに対し、(21) のように、「あの人」について多少説明が入り、描写が具体的になると「あの人」に焦点がおきやすくなり、(21) Bb の許容度は(20) Bb より高くなる .

- (22) A 「兄弟は何人いますか .」(15 課)

B 「妹が二人います .」

A 「妹さんはいいくつですか .」

Ba 「上の妹は21です . 銀行で働いています . 下の妹は18です . 今、大学で勉強しています .」

? Bb 「上の妹なら21です . 銀行で働いています . 下の妹なら18です . 今、大学で勉強しています .」

「なら」はそれのついたものに焦点を当てる機能を持つため、Bbは焦点が多くなりすぎておかしな文になっている。これは

Bc「上の妹なら21ですが、下の妹はまだ18です。」

のように、一方に焦点をあて、それを高梨（1995）も述べているように肯定的に評価する必要がある。

例えば次のような会話では

(23) A「僕たちタクシーで行くけど、よかったら一緒にどうですか。」(作例)

Ba「どうも。私は電車でいきます。その方が便利なので。」

「僕たち」と「私」を対比させるため、主題を明示する必要がある。しかし、この主題を

Ba「どうも。私なら電車でいきます。その方が便利なので。」

にすると、「あなたが私のことを心配しているなら大丈夫。私のことなら電車で行けるので心配いりません」と「私」を焦点化した自意識過剰の文になってしまう。それは、焦点化と肯定的評価の働きによるものであろう。

ここで最初の例文にもどろう。

(1) A「日本についてどう思いますか。」(21課)

Ba「交通が便利だと思います。」

? Bb「日本なら交通が便利だと思います。」

(1) Bbがおかしいのは、「(日本について)どう思いますか」と聞いているのに対し、「日本なら」と「なら」を使うと、日本に焦点がおかれ、「日本はこうだがほかの国は…」と答えることになり、質問の意図と答えが食い違うことになるためである。

以上をまとめると、主題の明示と省略については、何について語っているか明白な場合のもっとも中立的な表現方法は省略であり、「は」による主題の明示は場合によって対比の意味を持つ。そして、「なら」による主題の表示は「は」よりもっと対比のコントラストが強い。主題の「なら」は前件を焦点化し、肯定的に評価するのに対し、それと対比するものを否定的にとらえるものであると言える。

相手から提示された事柄はなんでも「なら」でうけて主題化できるかどうかは、文脈上、あるいは社会的常識上、そのものと対比できるものの存在が考えられるかどうかによる。対比できるものがないもの、たとえば母国、勤務する会社などについて語る場合には「なら」でうけるとおかしくなる場合がある。

次に例(2)を見てみよう。

(2) A「イチロー、大リーグ記録達成したね！」

Ba「ほんと、イチローってすごいね！」

? Bb「ほんと、イチローはすごいね！」

Bc「ほんと、イチロー、すごいね！」

? Bd「ほんと、イチローならすごいね！」

(2)では、答えとして「ほんと、すごいね」より、「ほんと、イチローってすごいね」といっ

たほうが適当なところから見て、前件であるイチローに焦点があたっていると見えるだろう。そして、イチローについて肯定的な評価を述べている点でも、これまで述べてきた「なら」文の条件は満たしている。しかし、(2) Bはa.cが自然な文である。これは後件に制限があるためであろう。

4 後件について

4.1 文末表現

文末表現の制限を考えるために南(1974)をもとにした田窪(1987)の文の階層構造を参考にしよう。田窪は文、節を以下のように分類している。

- A1 : 様態・頻度の副詞 + 動詞
- A2 : 頻度の副詞 + 対象主格 + 動詞 + (否定)
- B : 制限的修飾句 + 動作主格 + A + (否定) + 時制
- C : 非制限的修飾句 + 主題 + B + モーダル
- D : 呼びかけ + C + 終助詞

接続助詞は上の分類のどの段階までを含みうるかによって以下のように分けられる。

- A : - て (様態), ながら (同時進行), つつ, ために (目的), まま, ように (目的)...
- B : - て (理由, 時間), れば, たら, から (行動の理由), ために (理由), ので, ように (比況)...
- C : から (判断の理由), ので (?), が, けれど, し, て (並列)...
- D : と (引用), という

一般的に条件を表す接続助詞はB類と分類されるが、網浜(1990)は「から」にC類の用法があると同様、「なら」にもC類のものがあると述べている。

一方、野田(1995)は述語の階層構造を以下のように説明している。

かけ - られ	てい	なかっ	た	みたいだ	ね
語幹	ボイス	アスペクト	肯定否定	テンス	事態に対する
				ムード	聞き手に対する
				ムード	ムード

そして主題のとりたての階層を認定する方法として(1)どんな述語と呼応するか,(2)どんな成分をとりたてるか,(3)どんな従属節の内部にはいるか,の3つの方法を使い,主題「は」は事態のムードの階層,主題の「なら」は聞き手に対するムードの階層に属すると結論づけている。

(24) これは本物だ。

? (25) ぼくはもう帰ろう。

(26) 吉本ならあそこにいるよ。

? (27) 吉本ならどこにいる?

(24)から(27)は野田(1995)の例文である。野田は,主題の「は」は,(24)のように事実を述べる文で使えるのに対し,(25)のように意志を表すムードなど未確定のムードとは呼応しないので,事態に対するムードの階層に属すると考えている。そして,主題の「なら」は(26)

のように終助詞のついた文で自然に使え、真偽判断をする(27)のような事態に対するムードの述語とは呼応しないところから、聞き手に対するムードの階層のものだと述べている。

本稿では、主題「なら」の文は聞き手に対するムードを要求するものととらえる。それは例えば(32)(33)の例に見られるように、「なら」の文には話者の判断とともに伝達態度を示すムードがつけられると落ち着くこと、4・2に述べるように個別的な事柄を取り上げて述べることによる。

4・2 後件の性格

高梨(1995)によると、主題の「なら」の文の後件は名付け、推量的判断、当為的判断、主観的評価などがくるとのことである。また、一般的な「なら」の文の後件には話者の意志も使えると言われる。以上あげられた形で「なら」の文を作ってみよう。

(29) イチローならマリナーズの選手だ。(名付け)

(30) イチローなら来年もきっと記録を更新するだろう。(推量的判断)

(31) その試験なら絶対受けるべきだ。(当為的判断)

(32) その映画ならおもしろかったよ。(主観的評価)

(33) 私なら今日は行かないよ。(話者の意志)

高梨が主題の「なら」の文の後件の中に「話者の意志」を入れなかったように、話者の意志を文末に持ってくると、「あなたが私の明日の予定を知りたいなら」のように、仮定条件の意味に近くなる。

では、上の文末表現の文は制限なしに「なら」と共起できるのであろうか。

森田(1990)は「なら」の後件には話者の判断、意志、推量などがこなければならぬと述べている。実際、

(34) A「きのう田中さんの恋人に会いました。」(8課)

B「そうですか。どんな人ですか。」

Aa「きれいな人です。」

? Ab「田中さんの恋人ならきれいな人です。」

Abはおかしい。「なら」を使いたければ、「きのう」の話ではなくして、

「田中さんの恋人なら、あのきれいな人ですよ。」

にするとすわりがよくなる。主題の「なら」の後件に描写を使う場合は、一般的な事柄ではなく、相手から出された情報をもとに、話者がそれを取り上げ、それについて自分の評価を述べる、描写の対象は特定できるものである必要があるのであろう。

(35) a日本人はよく働くとおもいます。(21課)

? b日本人ならよく働くとおもいます。

上のaは一般的な事柄を述べている。それをそのまま「なら」で受けると違和感がある。しかし、bは、例えば、シンガポールの工場で人を募集したところ、日本人の若者が応募してきた。その若者を採用するかどうか、人事課の人と工場長が話している場面を想像するとどうだろう。「日本人ならよく働くだらうから、彼を採用しましょう」という個人の話になれば(35)bはおかしくなく成立する。

(36) a あの大学は有名です。

b あの大学なら有名です。

(36) b も、「あの大学なら有名だから、君が入ろうとするのは賛成だ」というように、話し手聞き手と何らかの関係がある場合には使える。

主題の「なら」は一般的な事態のムードの範囲にとどまるのではなく、話し手聞き手の個人間の話という文脈が必要な、特定の場面での表現なのである。評価も判断も一般的なものではなく、話し手の評価であり判断である必要がある。

4.3 「Nって」との関係

例(2)をもう一度見てみよう。

(2) A 「イチロー、大リーグ記録達成したね！」

Ba 「ほんと、イチローってすごいね！」

? Bb 「ほんと、イチローはすごいね！」

Bc 「ほんと、イチロー、すごいね！」

? Bd 「ほんと、イチローならすごいね！」

主題をあらわす「って」について、渡辺(1995)は以下のように述べている。

主題の「は」は記憶された情報をファイルから取り出すときに使う。「って」はXに関する新たな属性をファイルに取り入れるときに用いる。そのときのファイルは〔-時空〕である。主題の「」は〔+時空〕のファイルへの新たな属性の取り入れに使われる。

(37) (納豆をはじめて食べて)

a うっ、納豆ってくさい!

? b うっ、納豆、くさい!

(38) (社内野球でファインプレーをした田中社長を見て)

田中社長、すてき!

(39) (田中社長に初めて会って)

田中社長ってすてき!⁴⁾

つまり、これまで気づいていなかった属性を話題にするときには主題のマーカ―として「って」が、一時的な状態を話題にするときには「」が用いられるということである。

「って」と「なら」の違いを見てみよう。

(40) a あの人って信頼できる。

b あの人なら信頼できる。

(40) a は、「あの人」がなにかしつかりしたことをしたのを見た人が、あの人は信頼できる人だと結論を出したとき、つまり新たな発見をしたときの表現であろう。それに対し、b は以前から知っていた人についてコメントを聞かれた場合、推薦する言葉として発せられたと解釈できる。似たような表現だが

(41) a 彼なら任せられる。

? b 彼って任せられる。

(41) b はおかしい。(41) a はこれまで「彼」の仕事ぶりを見てきた人が、別の仕事について、

彼なら大丈夫と述べているものである。これに対し、bは「って」を使っているため、新しい属性の発見でなければならないが、「任せられる」という表現はその人を知っていて別の仕事を与えようとするときに出てくる言葉なので、状況にあわないということであろう。

もう一つ例を出すと、

(42) a 山田さんってどの人？

? b 山田さんならどの人？

(42) bが言えないのも同じ理由である。「なら」は知っているものについて述べなければならないのである。

(2) A 「イチロー、大リーグ記録達成したね！」

Ba 「ほんと、イチローってすごいね！」

? Bb 「ほんと、イチローはすごいね！」

Bc 「ほんと、イチロー、すごいね！」

? Bd 「ほんと、イチローならすごいね！」

(2) は相手からイチローのことが話題に出され、話者はそれを受けてイチローについて語っている。大リーグ記録達成は新たなことなので、それを成し遂げたイチローを「って」で受けるのは規則どおりである。これに対し「なら」は相手から出された話題について、自分の知っていることの中から情報を集め組み立てて、自分の判断や評価を述べるという性格を持っているので、Bdはおかしいと感じられるのであろう。「なら」を使って上の会話に参加するとしたら、以下のようになるであろう。

(43) 「イチロー、大リーグ記録達成したね！」

「ほんと、イチローなら、来年度もきっといい成績を残すだろうね。」

(43) が述べているのは、イチローについての話者の知識を下にした来年度のイチローの活躍の予測である。「なら」を使うときには、自分の知っていることから出てくる評価や判断でなければならないのである。

以上まとめると、主題の「なら」の文では、名付け、推量的判断、当為的判断、主観的評価などの表現が使われ、文末には話者の判断評価のムードが必要である。そして、述べる内容は、一般的な事柄ではなく、話者と相手との会話の中に出てきた個別の事柄である。また、「って」との比較で見ると、「なら」は話者の知っていることからでてくる判断や評価でなければならない。

注

- 1) 例文(3)から(7)までは丹羽の例文を、(8)は高梨の例文をそのまま使った。
- 2) 「なら」を提題助詞として扱う立場は例えば益岡(1992)などである。
- 3) 寺村(1991)では、主題について、対比的意味の生ずる条件として、「昔 - 今」「男性 - 女性」などのように語の意味の中に対比されるものの存在が含まれているもの、ということあげている。
- 4) 例文(37)から(39)までは渡辺(1995)の例文

参考文献

丹羽哲也(1993)「仮定条件と主題」『国語国文』62巻10号 京都大学

- 高梨志乃(1995)「非節的なナラについて」仁田義雄編『複文の研究』くろしお出版
- 中島信夫(1990)「日本語の条件文「...ナラ...」について」『甲南大学紀要』甲南大学
- 渡辺誠治(1995)「ある要素に対する新規の属性の取り入れに関わる形式」『日本語・日本文化』21号
大阪外大留学生日本語教育センター
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』明治書院
- 網浜信乃(1990)「条件節と理由節 ナラとカラの対比を中心に」『待兼山論叢』
- 森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社